

ガ～シタイとヲ～シタイ —格標示のゆれに関する一考察—

庵 功 雄

要 旨

願望文の目的語の格標示には「水が飲みたい／水を飲みたい」のように2つの可能性がある（この現象を「ガーヲ交替」と呼ぶ）。しかし、実例における分布やその他の考察を行うと、実際にはガは極めて限られた語彙・構文上の環境にしか現れないことが分かる。本稿ではこの構文における無標の格標示をヲと考え、有標であるガが現れることができない環境を記述した。その結果、この現象には「典型性」と「他動性」という2つの要因が関与していることが分かった。この2つの概念を導入することで、単純形だけでなく、複合形におけるガとヲの分布も説明できるのである。

【キーワード】 ガーヲ交替, 典型性, 他動性, 構文的複雑さ, アスペクト表現

0. はじめに

日本語教育の現場で作文の添削をする際など、母語話者の中で判断のゆれがある形式の場合判断に迷うことがある。本稿ではそうした形式の一例として、「本が読みたい」（以下ガ～シタイ）、「本を読みたい」（以下ヲ～シタイ）のような「たい」を含む複合形式における下線部の格標示を考える。

1. 考察の範囲

本稿の考察の範囲は統語的には次のようなものである。

(I) [NPガ [NP1ガ NP2ヲ V1] _{si}タイ] _s (NP=NP1の時NP1は表層で削除)

即ち埋め込み文 (S1) 中のヲ格がガ格に交替するか否かを考える（この点を強調しこの現象を「ガーヲ交替 (GA-O conversion)」と呼ぶことがある）。従って、次の例のように埋め込み文がヲ格を取らないものは考察の対象外である。

(1) 私は東京へ行きたい。

cf. [私が [(私が) 東京へ行き] s₁たい] s (コト)

2. 先行研究

ここでは先行研究を概観する（紙幅の都合上、包括的ではない）。

この構文を考える際まず取り上げなければならないのが、「足が痛い」「飯が食いたい」などのガ格を「主語の感情を触発する機縁となる」ものとして「対象格」とした時枝（1950）である。次に松村（1957）はガ～シタイが規範であるという説に対し、共時的にも通時的にもガ～シタイとヲ～シタイは共存してきたもので、一方が規範であるとは考えられなかった。一方、国立国語研究所（1964a）は90種の雑誌の用例の分析結果から、実例ではヲ～シタイが圧倒的に多く用いられていること、特に間に他の要素が介在するときにはガ～シタイは全く用いられないということを指摘している。

これに対し、大江（1973）は「買う～売る」のように方向性がある動詞では、「買う」のような話者に近づく方向性を持つ動詞の方がガを取りやすいこと（cf.(2)）⁽¹⁾、及び、その名詞が焦点になっているときはガの方が適格になると主張している。（以下、例文は文法性の判断を含めた形で引用する）

(2) ほくは車が買いたい／？*売りたい。（大江(1973)）

他方、久野（1973）は「買う」と「購入する」のような対応する和語と漢語の場合、漢語はヲを取りにくいことを指摘している（cf.(3)）

(3) 本箱が買いたい／？購入したい。（久野(1973)）

さらに、井上（1976）は同じ複合形式でも(4)のようなアスペクト形式⁽²⁾と(5)(6)のような使役、受身ではガの許容度に差があることを指摘している。

(4) 私は、一度中学生が（／を）教えてみたい。

(5) 僕は、ジョンに日本語*が／を話させたい。

(6) 我々は、人に自分の仕事*が／をほめられたい。（井上(1976)）

また、柴谷（1978）は時枝（1950）の「対象格」は統語範疇と意味範疇の混同であるとし、この場合のガ格は統語的には「直接目的語」としてしている。また、(7a-d)から分かるように、ガ格名詞句と述語との距離が大きくなる程ガ格の許容度が下がることを指摘している。

- (7) a. あたし、あなたとゆっくりお話をしたかったの。
 b. ?あたし、あなたとお話がゆっくりしたかったの。
 c. *?あたし、お話をあなたとゆっくりしたかったの。
 d. *お話をあたし、あなたとゆっくりしたかったの。(柴谷(1978))

なお、渋谷(1994)には(可能動詞を対象としたものだが)格パターンの通時的変遷が巧みにまとめられており、この構文を考える上でも参考になる。

3. 問題点

以上概観した先行研究はいずれもこの現象の一側面を記述しているが、問題点もある。例えば、井上(1976)が(4)の現象を指摘しているのは注目すべきだが、同じアスペクト形式であるテイルは全くガを許容しない⁽³⁾。

- (8) 見る方では、実は全体の図を見たい。相撲なら頭から足の先までを(/*が)見ていたい。(天声人語 1993.4.5)

また(9)は上の条件(漢語ではない、述語と隣接している)を満たしているが、ガは許容できない。

- (9) 「なぜ、おれを(/*が)殺したいんだ」(ボッコ)
 このように、ガーヲ交替には今少し深い考察が必要である。

4. 実例における分布

ここで実例におけるガ～シタイとヲ～シタイの分布を概観する。資料は『芥川賞全集』(文藝春秋社。1～15。12, 14を除く), 「天声人語」(1985～1993.9)である。分類に際しては国立国語研究所(1964b)の意味分類を用いた。

本稿末につけた(表1)は意味分野毎の分布を示したものである(紙幅の関係で意味分野は単純化してある。より細かい分類を行うと単純形⁽⁴⁾でガ～シタイが多く使われるのは、2.33(文化・風俗)=16, 2.31(呼び名・名付け)=11, 2.34(行為)=10で、ヲ～シタイが多く使われるのは2.309(見る)=98, 2.306(思考・認識・知解)=90, 2.34(行為)=80, 2.37(所有・取得)=74である)。一方(表2)はガ～シタイで使われる度数5以上の動詞を、(表3)はヲ～シタイで使われる度数10以上の動詞を挙げたものである。

(表1)を見ると、ヲ～シタイは比較的多くの意味分野において用いら

れているのに対し、ガ～シタイは用いられる意味分野が限定されていることが分かる。またガ～シタイは複合形では殆ど使われていない（1例のみ⁽⁵⁾）。さらに表にはないが漢語動詞の場合にはガ～シタイの用例は1例もなかった。

一方（表2）（表3）から、ガ～シタイが使われる時の動詞は限定されているが、ヲ～シタイにはそうした制約がないことが分かる。このことから、本稿ではこの構文におけるガとヲについて次のように考える。

（II）この構文ではヲ～シタイが無標である。即ち、ガ～シタイが使えてヲ～シタイが使えない、ということはない。

5. いくつかの制約

ここでガ～シタイとヲ～シタイの分布を概観する。そのために（II）に基づきガ～シタイが使えない（／使にくい）例を見ていく。

まず「動詞」が単純形か複合形かに関わらずガ～シタイが使にくいのは①述語が漢語である場合（cf.久野(1973)の条件。cf.(3)）と、②目的語と述語の距離が離れた場合（柴谷(1978)の条件。cf.(7)）である。

次に、単純形でガ～シタイが使にくいのは次のような場合である。

③「動詞」の目的語の意味役割が「対象」でない場合

(10) 私は早くこの電車を／＊が降りたい。(M&T(1986))

(11) 危険地帯である日本を／＊が出たい気持はよく解った。(広場)

(12) 「人間の本能のようなもので、空を（／??が）飛びたい、山の頂上に立ちたい、と思うことがあるでしょう」。(天声人語 1993.5.19)
(意味役割：(10)(11)は「出どころ」、(12)は「経路」⁽⁶⁾)

④定型表現の場合

(13) なんだかそうして気を／??がまぎらしたいような、せつなさが残っていた(乗合)

(14) 彼女とやり直すために、この世界から早く足を／??が洗いた

い。

(15) 帰り道で水たまりに足を突っ込んでしまったので、家に返って早く足を／が洗いたい。

(13)(14)のような定型表現（「気をまぎらす」「足を洗う」）ではヲをガに変えるのは難しい（同様の記述が大江(1973)にもあるが、本稿ではこの制約の適用範囲を定型表現に限定する）。一方、同じ「足を洗う」でも(15)のような

非定型表現の場合にはヲをガに変えることができる。

⑤ 他動性が高い場合

(16) 「なぜ、おれを(/ *が) 殺したいんだ」 (= (9))

(17) すこぶるいかさない草色の作業衣など着こんで鉄砲かつぎに身をやつしているのも、元はといえばぼくの中にある何かイヤなものを(/ ??が) 壊したいからだ。(草の)

これに対して次のような「動詞」の場合にはガ〜シタイも使える。

(18) 勇は氷水が(/ を) 飲みたいと思った。(九月)

(19) 「ライスカレーが(/ を) 食べたかった」と私は言った。(アパッチ)

(20) 生きるのが下手な人と話が(/ を) したい。(引き)

(16)(17)と(18)~(20)の違いは次のようなテストで確かめられる。

(21) a. 太郎はコーヒーを飲んだ。

b. ??そのコーヒーは太郎に(よって) 飲まれた。

(22) a. 太郎はケーキを食べた。

b. ??そのケーキは太郎に(よって) 食べられた。

(23) a. 健が勇を殺した。

b. 勇は健に殺された。

(24) a. 健太がおもちゃを壊した。

b. そのおもちゃは健太に壊された。

つまり、「飲む」「食べる」のような前者のタイプの動詞は他動性が低いので受身が作りにくいのに対し、「殺す」「壊す」のような後者のタイプの動詞は他動性が高いので容易に受身を作れるのである。

一方、(表1)(表3)から分かるように、複合形ではガ〜シタイは許容されにくい。例えば次のようである。

(25) おまえのなにかもを(/ ??が) 食べてしまいたい。(村の)

(26) クリスマスの前に一度母を呼び出したことがある。チッチー以外の誰かに話を(/ ??が) 聞いてもらいたかったのだ。(背負い)

(27) この点については以下の文献を(/ *が) 見られたい。

しかしテミル(とテオク)は(①~⑤の制約に抵触しない限り)ガを許容する。

(28) 繰り返して読むうちにひとこと声を(/ が) 聞いてみたいという気持ちになった。(伸子)

(29) 正子が仕事をしているところを(/ が) 見てみたいと、敏夫が言い

出したのであった。(やまあい)

(30) 入院する前にあの本(?)が／読んでおきたい。

以上の制約をまとめると次のようになる。

(III) a. 語彙的制約:

- 1 漢語動詞はガを取りにくい (cf. 久野(1973))⁽⁷⁾。
- 2 「気をつける」等の定型表現ではガは使いにくい。

b. 統語的制約:

- 1 テミルとテオク以外の複合形はあまりガを許容しない。
- 2 目的語と述語の間に他の要素が介在するとガの許容度が低下する(柴谷(1978)の条件)⁽⁸⁾。

c. 意味的制約:

- 1 補文のヲ格の意味役割が「対象」以外の時はガは使いにくい。
- 2 「動詞」の他動性が高いときにはガが使えない。

このうち、a-1, b-2, c-2はガ~シタイが成立するための必要条件で、これに接触すると、他の制約を抵触しなくてもガ~シタイの許容度は低くなる。

6. 制約に対する説明

5. ではガ~シタイが成立するために満たさなければならない制約をいくつか見た。ここではこうした制約がなぜ存在するのかということを考えてみたい。ただし、a-1 は純粹に語彙的な制約であるのでここでの考察から除く。

まずb-2を考察する。(7)や(31)から分かるように他の全ての制約に抵触しなくてもb-2に違反するとガ~シタイは不適格になる。このことからb-2は他の4つとは異なるレベルの制約であることが分かる。

(31) 私は水を／*が出かける前に飲みたい。(M&T(1986))

これにはShibatani (1975)に次のような説明がある。Shibatani (1975)は次のような文認識のための知覚規則(perceptual rule)を立てている。

(IV) a. X NP ガ Y → X [_s NP ガ Y

b. V-Tn X → V-Tn]_s X (Tn: テンス)

つまり、ガを伴う名詞句が現れるとそこから文が始まると知覚され、テンスを伴う定形動詞がくるとそこでその文が終わったと知覚される、というものである(cf. 32)。33/34の場合も2回目のガ(「目的語」のガ)はまず

「主語」と解釈されるが、(32)とは異なり) 定形動詞は1回しか現れないので文構造の再分析が行われることになる。この場合(33)(34)のように述語がすぐに現れれば再分析は容易に行えるが、(35)のようにガ格名詞句と述語の距離が大きくなる(述語が現れるのが遅れる)とそれだけ再分析が難しくなりそのため、文の許容度が下がる、というのがShibatani (1975) の説明である。

(32) 太郎が花子が本を読んだと思った。

[_s太郎が [_s花子が本を読んだ] _sと思った] _s

(33) 太郎が花子が好きだ。

[_s太郎が [_s花子が好きだ

(34) 僕が寿司が食べたい。

[_s僕が [_s寿司が食べたい

(35)* 僕が寿司が君と一緒にあそこに見える寿司屋で食べたい。

[_s僕が [_s寿司が君と一緒にあそこに見える寿司屋で食べたい

(32)–(35)はShibatani (1975) より)

b-2 に対してはこの説明が当を得ているように思われる (cf. 渋谷 (1994))。

ここで次の原則を仮定する。

(V) ガーシタイは典型的な語彙-構文上の環境でしか許容されない。

こうした仮定をするのは、ガーシタイが現代語では既に有標な構文であり、そうした構文は典型的な場合にしか生じないと考えられるからである⁽⁹⁾。

次に他の4つの制約を説明するために次の2つの原則を立てる。

(VI) ガーシタイ構文が成立するためには、

α. 埋め込み文が、構文的複雑さがない動作を丸ごと捉えた典型的他動詞である。

β. 「動詞」の他動性が低い。

という2つの原則を満たさなければならない。

本稿では「目的語の意味役割が対象であるもの」を「典型的な他動詞文」と定義する。この定義を満たさない「動詞」からは受動文は作りやすく、それが取るヲ格は典型的な目的語ではない (cf. Masuoka (1980)) ことから、この定義を満たす文を「典型的な他動詞文」と呼ぶことは妥当である。一方、ガーヲ交替は埋め込み文中のヲ格を問題にするものであるので、こ

うした条件が必要とされるのは至当であると考えられる。

すると α から (IIIc-1) は直接説明される。また (IIIa-2) も α から説明できる。なぜなら、典型表現におけるヲ格は修飾語がつけられないなどの点において典型的な目的語と異なっているからである (cf.(36)(37))。

(36) やくざな暮らしから ϕ /*汚れた足を洗った。

(37) 家に帰って ϕ /汚れた足を洗った。

一方、大部分の複合形はガ～シタイを許容しない。本稿ではガ～シタイを許容しない複合形を次の2つのグループに分ける。

(VII) A. テモライタイ, テイタダキタイ, (サ)セタイ, (サ)レタイ…

B. テシマイタイ, テイタイ, テイキタイ…

まず、Aグループの構造は次のようになる (ただし、同一指標の名詞句の内埋め込み文中のものは表層で削除される)。

(VIII) a. [_sNP1ガ NP1ノタメニ NP2ニ [_{s1} [_{s2}NP2ガ NP3ヲ Vて] もらい/いただき] タイ]

b. [_sNP1ガ NP2ニ [_{s1} [_{s2}NP2ガ NP3ヲ V] させ/され] タイ]

c. [_sNP1ガ NP2 (ノタメ) ニ [_{s1} [_{s2}NP1ガ NP3ヲ Vて] やり/あげ] タイ] (10)

(I)' [_sNP1ガ [_{s1}NP1ガ NP2ヲ V] タイ]

(VIII)と(I)'を比べると一見して分かるように、(VIII)ではガ～ヲ交替の対象となるヲ格名詞句とタイの距離が大きく、表層にニ格が存在し、(c.を除いて)願望者(NP1)と動作主(NP2)は異なる(11)。こうしたことからAグループでガ～シタイが許容されないのは構文的複雑さのためと考えられる。

一方、Bグループはアスペクト表現であるが、日本語では「動作の一面」は「願望」の典型的な対象ではない。次の例を考えていただきたい。

(38) 明日はあの本*が/を読んでいたい。

(39) 早くあの本*が/を読んでしまいたい。

(40) *あの本が/を読みかけたい。(cf.あの本はもう読みかけている。)

(41) ??あの本が/を読みだしたい。(cf.あの本はもう読みだした。)

アスペクトとは「動詞の表す動きの全課程のどの局面に焦点を置いて、その動きを捉え・表現するか」を表す文法カテゴリーであり(仁田(1987)),ル形(/タ形)が担う「一次アスペクト」(寺村(1984))以外は、動きの全体ではなく一局面を捉えているに過ぎない。

ここで(40)(41)からシカケル、シダスは助詞がガであるかヲであるかに関わらず願望表現を形成できないことに注意したい。これは「動きの一局面」が典型的な願望の対象ではないと考えれば説明できる。そうするとBグループでガ～シタイが許容されにくいことは上述の(V)の原理から説明できる。

これに対し、テミル(テオク)はガ～シタイを許容する。

(42) あの本が／を読んでみたい。

(43) 入院する前にあの本(?)が／を読んでおきたい。 (=30)

ここで確認しておかなければならないのは、(42)のテミル、(43)のテオクは上述の「動きの一側面を表す」という意味のアスペクトではないということである。テミルはある動作を試みにすることであり、テオクはある動作を予めしておくことであるが、いずれにしてもその動作は全体として捉えられており、その意味で典型的な願望の対象になり得ると考えられるのである。

以上の各点から(VI α)の妥当性が示された。

これに対し、(VI β)は「典型性」とは独立の概念であるが、(IIIc-2)を説明するためにはどうしても必要である。さらに次のような現象もある。

(44) a. むしゃくしゃして、太郎??が／を殴りたかった。

b. むしゃくしゃして、誰かが／を殴りたかった。

(44a)ではガは許容しにくい、(44b)ではしやすい。これは目的語が不定名詞句になったことで動詞句全体の他動性が下がったためであると考えられる(目的語が特定の場合の方が不定の場合よりも他動性が高いことについては、Hopper & Thompson(1980)にも指摘がある)。

以上のように、ガ～シタイが許容されるには、「動詞」が「構文的複雑さのない、動作を丸ごと捉えた典型的他動詞」であり、かつ「他動性が低い」ことが必要なのである。

7. おわりに

本稿では格標示のゆれの例としてガ～シタイとヲ～シタイの2つを比較した。その結果、ガ～シタイは使われる動詞の種類が極めて限定されており、様々な制約から使えない場合もいくつかあることが分かった。一方ヲ～シタイは基本的に常に使用可能である。以上のことから、現在ではヲ～シタイを無標の構文と見なすのが適当であると考えられる。

付記：本稿をなすに当たって、前田直子、日高水穂の両氏から貴重なご意見を頂いた。記して感謝申し上げます。

注

- (1) ただしこれは一般的には成り立たない。次の例を考えて頂きたい。
 - (ア) 英語が(?)が/を教わりたい。
 - (イ) 英語が/を教えたい。即ち、「買う」と同じ方向性を持つ「教わる」と「売る」と同じ方向性を持つ「教える」を比べると、ガの許容度は同じか「教える」の方が高い。
- (2) 後に見るように本稿では「てみる」はアスペクト形式とは考えない。
- (3) 以下、ガーシタイの許容度は「何がVたいのか」の答えとして用いられるような所謂「総記」の文脈以外の場合のものとする。
- (4) 本稿では述語からタイを除いた部分を「動詞」、「動詞」がテ形接続、使役形、受身形であるものを「複合形」、それ以外を「単純形」と呼ぶ。
- (5) その1例とは次の例である。
 - (ウ) それが、私に接した時に示す、彼女の虚勢に似た何時もの表情とは思って
みても、やはりもたれかかって来る甘やいだものが受け止めてみたかった。
(感傷)
- (6) 「経路」のガーシタイの許容度には母語話者間でもゆれが大きい。例えば Masuoka(1980)は(エb)を文法的とするが、M&Tは(オb)を非文とする。
 - (エ) 花子は車道(a)を/(b)が歩きたかった。(Masuoka(1980:93))
 - (オ) 私は公園(a)を/(b)*が歩きたい。(M&T(1986:444))なおMasuoka(1981)は「歩く」「出る」等が取るヲ格を疑似他動詞型(Quasi-transitive type. QT)、「立てる」「読む」等が取るヲ格(他動詞型(Transitive type. T))と呼び、(エ)を根拠にQTでもTと同様にガーヲ交替が適用可能であるとしている。論者も(エ)については文法性判断をMasuoka(1980)と共有するが、(10)-(12)のガ格の座りの悪さから考えて、Masuoka(1980)の一般化(QTでもガーヲ交替は可能)自体は受け入れられない。
- (7) ただし「勉強する」「運転する」等一部の自他両用の漢語動詞はガーシタイを許容しやすいようである(名古屋大学大学院生田祐子氏の観察による。なお、 ϕ はそこに要素がないことを示す)。
 - (ウ) 車が/を運転したい。(←たたくさん ϕ /車を運転したから疲れた。)
- (8) 可能動詞ではこの場合も若干ガが見られるようである(cf.渋谷(1994:58))。
- (9) これに関し考えてみたいのがガーノ交替である。まず述定ではガーノ交替は起こらない(※)。次に(ウ)のような装定ではガーノ交替が起こるが、(ウ)のようにガノ名詞句と述語との距離が大きくなるとノは使いにくくなる。

(キ) 太郎が／＊の本を買った。(「太郎の本」の意味ではない場合)

(ク) 太郎が／の買った本

(ケ) 太郎が／＊の友だちと買った本 (Shibatani (1975))

この場合、交替はクのような「典型的な」時は起こるが、ケのように典型性が落ちると起こらない。一方、ノは主格を表す形式としては有標である(キ)。これからも非典型的な環境では有標な要素は現れないと考えられる。

- (10) 本稿ではテヤル、テアゲルはボイス表現、テミル、テオクは非ボイス表現と考え (cf. 村木 (1991)), テミル形、テオク形は (I)' の V に入れるが、テヤル形、テアゲル形の場合はそうせずに (VIII) の S1 に当たる埋め込みを仮定する。そしてこの S1 節点の存在が後者におけるタイと目的語の距離を遠ざけガーシタイの座りの悪さの一因になっていると考える。
- (11) テヤルには (ロ) のようにニ格が表層に出ない例もあるが、テヤルの典型は (ハ) のような表層にニ格が現れるタイプでありそこからの類推でガーシタイの許容度が低いのであろう。(シ) のような三項動詞におけるガーシタイの悪さの原因も表層のニ格にあると思われる。
- (ロ) あいつ?? が／を殴ってやりたい。
- (ハ) 子供に本?? が／を読んでやりたい。
- (シ) 母にお金? が／を送りたい。

例文出典

ボッコ：星新一「ボッコちゃん」、広場：堀田善衛「広場の孤独」、乗合：中里恒子「乗合馬車」、草の：野呂邦暢「草の剣」、九月：高橋三千綱「九月の空」、アパッチ：小松左京「日本アパッチ族」、引き：さだまさし「引き潮」、村の：辻原登「村の名前」、背負い：萩野アンナ「背負い水」、伸子：高橋揆一郎「伸子」、やまあい：重兼芳子「やまあいの煙」、酒呑み：山口瞳「酒呑みの自己弁護」、感傷：田辺聖子「感傷旅行」

参考文献

- (1) 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語(上)』大修館書店
- (2) 大江三郎 (1973) 「願望のタイの前でのヲとガの交替」『文学研究』70 九州大学文学部
- (3) 久野暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- (4) 国立国語研究所 (1964a) 『現代雑誌九十種の用語用字Ⅲ』秀英出版
- (5) ————— (1964b) 『分類語彙表』秀英出版
- (6) 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- (7) 渋谷勝己 (1994) 「可能文における格パタンの変遷」『阪大日本語研究』6 大阪大学文学部日本文学言語系

- (8) 時枝誠記 (1950) 『日本文法口語編』岩波書店
- (9) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- (10) 仁田義雄 (1987) 「テンス・アスペクトの文法」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究8』情報処理振興事業協会
- (11) 松村明 (1957) 「「水を飲みたい」という言い方について」『江戸語東京語の研究』東京堂出版
- (12) 村木新次郎 (1991) 「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- (13) Hopper, J.P. & Thompson, S.A. (1980) "Transitivity in grammar and discourse" *Language* 56-2
- (14) Makino, S. & Tsutsui, M. (1986) *A dictionary of basic Japanese grammar* the Japan Times (M & Tと略記)
- (15) Masuoka, T. (1980) "The grammatical relation uniqueness principle and the causative construction in Japanese" 『神戸外大論叢』神戸市外国語大学研究会
- (16) Shibatani, M. (1975) "Perceptual strategies and the phenomena of particle conversion in Japanese" *Papers from the parasession on functionalism* Chicago

(大阪大学大学院博士課程後期3年)

(表1) (()内の数値は単純形全体に対する比率(%))

意味分野	ガ～シタイ		ヲ～シタイ	
	異なり	のべ	異なり	のべ
2.1 抽象的關係	1 (6)	1 (2)	131 (36.2)	205 (23.9)
2.3 精神及び行為	15 (88)	49 (96)	192 (53.0)	600 (70.0)
2.5 自然現象	1 (6)	1 (2)	8 (2.2)	11 (1.1)
その他単純形	0 (0)	0 (0)	31 (8.6)	43 (5.0)
(単純形合計)	17 (100)	51 (100)	362 (100)	859 (100)
複合形(テ形, 使役, 受身)		1		427
合計		52		1286

(表 2)

	意味分野	ガ	ヲ
する	2.34	10	69
食べる	2.33	10	7
言う	2.31	8	20
知る	2.306	6	23
飲む	2.33	5	1

(表 3)

	意味分野	ガ	ヲ
テモラウ		0	132
する	2.34	10	69
テミル		1	65
テヤル		0	64
サセル		0	43
見る	2.309	2	41
テオク		0	38
聞く	2.309	1	27
テイタダク		0	27
知る		6	23
言う	2.31	8	20
作る	2.38	0	20
テイク		0	19
考える	2.306	0	18
送る	2.152	0	14
テシマウ		0	14
避ける	2.35	1	13
テイル		0	11
見せる	2.309	0	10